

特別活動報告

メディアリテラシー教育の試み

待鳥 直子

はじめに

情報の媒体、メディアの多様化は、視聴覚教材にもさまざまな可能性を開いている。日本語の学習者にとって、情報を得る機会と手段の選択肢が広がっただけでなく、情報供給の手段もまたより身近なものになり、容易になってきている。それだけに、学習者は情報の受け手であると同時に送り手として、情報が伝えられるプロセスについての知識を持つことが望ましい。

情報がメディアを通して受け手に届けられるまで、企画、情報収集、編集という大きく3つのプロセスを経、受け手にとってわかりやすく説得力のあるものへとデザインされていく。つまり、語彙と文体、提示は、受け手の立場にたって選択され構成されているのである。受け手を明確に念頭においた情報伝達学習は、4つの言語スキルの向上につながる可能性を秘めている。正確な情報収集のための読解、聴解能力と、適切でバラエティーに富む表現ができる作文能力と発話能力である。テクノロジーを扱う能力の向上も、学習効果として期待できるだろう。

活動詳細

日 時：2005年7月27日

ク ラ ス：C4-A, B, Cの3セッション合同（学生33名 引率講師6名）

見学場所：NHK 渋谷放送局「生活ホットモーニング」「ニュース」「ためしてガッテン」「義経」スタジオ

学習内容：

1. 各スタジオの用途

テレビ放送番組は、視聴者の層、ニーズに最大限応じるよう計画される。スタジオのセットは、番組の性格と内容、そして視聴者層に親近感を与えるようにデザインされている。学生は、番組の性格によってセットの色やロゴ、デザインに演出の工夫がなされていることを学ぶ。

今回は、歴史連続ドラマ「義経」のスタジオ見学に特別の許可を受けた。一年間の連続ドラマなので、大掛かりなセットが配置されている。この番組のための特別スタッフチームが編成され、ドラマ出演者、関係スタッフが常駐できるよう控え室がいくつか用意されている。収録時はスタジオ全体が緊張感に包まれる。12世紀の日本を演出するための特殊なセットや番組を支える関係者への配慮を知ること、ひとつのドラマ番組制作に求められる仕事の内容を学生たちは学ぶ。

2. 撮影と画像管理

照明器具の効果について、ごく簡単な説明を受ける。撮影の終了したスタジオでは、カメラを実際に操作して小モニターで確認した。また、スタジオ内にあるモニターで

カメラ画像の切り替え、スタッフの仕事内容についても学んだ。

3. 番組内容と言語

見学を小グループで分割したため、全ての番組収録を見ることはできなかった。しかし、番組の内容によって使用される日本語の単語、文体、表現が違うことを学生たちは学ぶことができたと思う。また、視聴者が理解しやすい発音がどのようなものか、プロのアナウンサーや役者の発話を実際に耳にすることができた。

学生からのフィードバック

大多数の学生にとっては、初めての放送施設見学であった。番組制作に関わる作業、そして、それを支える技術と経験の大切さを学ぶことができたようだ。制作作業そのものについてまとめた学習はできなかったが、スタジオによってがらりと変わるセットと照明を見ることで、演出の重要性とそれに関わるスタッフの仕事を断片的に知ることができたと多くの学生が書いている。「義経」は、時代の設定が12世紀ということもあり、他の番組とは違いが際立っている。歴史ドラマのセットと衣装は、写真では得られない視覚学習効果があった。学生たちは番組制作に対するスタッフの真剣さと緻密な計画の必要性を、スタジオ内の息を張り詰めた緊張感と役者の演技から学んだようだ。

レギュラー番組や歴史ドラマの撮影、スタジオを見学したことで、話題が増えたと書いた学生もいた。口数の少ないホストファミリーの主人と共通の話題ができ、関係が円滑になったそうだ。また、親がハリウッド関係の仕事をしている学生は、日本のカメラコントロールがハリウッドとは反対で興味深いと述べている。カメラの操作は、多くの学生が興味を持ち、体験をすることで仕事の難しさが理解できたと言っている。最後に、NHKの番組制作に対しては、高く評価している学生が多かった。機材や人材にコストをかけることで、質の高い番組が提供できていると述べている。イメージキャラクターで視聴者に親しみやすさをアピールしている点を、効果があると評価している学生も数人いた。

活動の評価と展望

33名という学生数では、ひとつのスタジオ内での見学が難しく、小グループに分かれての複数のスタジオ見学となった。結果的には、性格の違う番組のスタジオを複数見学することで、視聴者層、情報内容の違いによる制作と演出の違いを鮮明に知ることができた。テレビ放送というメディア学習を通して、大きく二つの点が学習できたと思う。

ひとつは、情報の演出である。テレビ情報は文字言語、音声言語、画像、音楽4つの基本要素全てが組み合わされてできている。それらの要素を情報の性格、社会的重要度によって使い分けることで、番組がわかりやすくまたは楽しくなる。日本語を学ぶという点に注目すれば、受け手の層、ニーズを分析することで、より明確な伝達方法を特定できる。つまり、適切な単語、文体、表現、演出がどうあるべきかを具体的に特定できる。

ふたつめは、現代日本文化の断面である。大多数の人が見るテレビ番組を知ることは、ある意味で、日本の大衆文化を学ぶことでもある。現代の日本社会でどのような話題が注目を浴びてい

るのか、どのような情報や映像が求められているのかといったことが、画像とキーワードを手がかりに知ることができるのである。ある学生のフィードバックにあったように、年齢の離れた日本人とも共通の話題を持つことが可能なのである。これはまた、日本語母語話者との会話の機会を増やし、話題の幅を広げることにもつながる。

母語話者との会話に参加すること、あるいは参加できる能力を高めることは、学習意欲を高める助けとなる。そのような意味で、メディア学習は、日本語学習者のコミュニケーション能力を身につけるきっかけを与えるといえる。メディアの特性を知ること、限られた日本語能力の中でも、効果的な情報の提供、また表現を可能にするアプローチの幅が広がるのである。特に音声言語表現については、内容と聞き手にとって効果的な速度や声量調節など、放送関係で特に配慮されている発話上のテクニックとスキルをもっと授業に取り入れることで、日本語学習者の音声コミュニケーションスキルの向上を図ることができるだろう。ただし、メディアの学習には、コンピュータ機器や放送機材、施設が求められる。日本人児童や生徒へのメディア教育振興とともに、放送施設も教育機関に対してはより協力的になってきている。こうした施設の積極的な利用も今後の日本語教育の質の向上に結びつくだろう。